



# おたすけこそ ようぼくの使命



真剣におつとめを勤める学生たち (10月29日 学生会総会)

## 真 明

発行所  
天理教芦津大教会  
〒546-0003  
大阪市東住吉区  
今川8丁目6番32号  
電話 06 (6702) 1980  
FAX 06 (6700) 1854  
Eメール shinmei@ashitsu.or.jp  
印刷所 天理時報社

さあ〜人間の誠の心の理が人の身を救  
けるのやで。さあ〜人の誠の心が我が  
身救かるのやで。  
明治21年8月9日

初代真柱・中山眞之亮様は、道の将来を担う若者たちに対し、「この道は、智慧や力で行く道ではない」として、おさづけの理を拝戴していながら、おたすけができないようばくにならないよう、常におたすけの実践をお促しくださいました。こうした薫陶を受けた若者たちは、教祖四十年祭、五十年祭時の白熱的な布教の中心となって活躍しました。

ようぼくとは「陽気ぐらし世界建設のための人材、用材」という意味です。この教えを周囲の人々に伝え、陽気ぐらし世界の実現に向けて力を尽くすことがようぼくの使命ですが、最も大切な御用は、つとめとさづけをもつておたすけに励むことです。おつとめにたすけ心を湛え、身上の方に親身になって寄り添い、おさづけを取り次ぎ、心の向きを変えていただくよう促す。大教会は、年祭活動2年目の活動目標に「1教会に初席者2名以上の御守護を」掲げています。この旬に多くの方をようぼくへと導くと同時に、つとめとさづけを実行して、自らもおたすけのできるようばくと成人させていただきましょう。

## 正面方加

『よくしなる綱の上の踊り子を見上げる群衆は、いつの間にか自分の体をくねらせよじらせてバランスをとる。』

18世紀スコットランドの経済学者・哲学者、アダム・スミスは、人は、感覚が伝染したり、他人の心情に同感したり、他人の立場に立つて思考したりというように、人には他人のことを心に懸けずにはいられない性向がある、と言った。

『道徳感情論(村井章子・北川知子訳)』には、「私」という囲いを超え出る働きは、身体の中でいつもすでに蠢きだしている。

陽気ぐらしの元なるいんねんを魂に頂戴する私たち。故に「私」を「他」に向け、相手の立場に立つて共感し、たすけ合うことができるのだ。

教祖お一人から始まった道は、たすけた人からたすける人ができ、道を聞き分けた人からまた聞き分ける人ができる。今はたすけの旬である。

## 《秋季大祭神殿講話》

打てば響き、蒔けば実る句  
勇んでおたすけに励もう

大教会長 井筒梅夫

世界一れつをたすけたい

ご承知の通り、天保9年10月23日に親神様が天降られて、家族や親族との3日間の問答の末、夫・善兵衛様の「みきを差し上げます」との決心によって、教祖は月日のやしろと定まられて、天理教は立教しました。

「我は元の神・実の神である。この屋敷にいんねんあり。このたび、世界一れつをたすけるために天降った。みきを神のやしろに貰い受けたい。」

とのお言葉が、立教のご宣言であり、世界たすけをご宣言くださったお言葉です。つまり「世界中の人間を、隔てることなく、余すことなくたすけ上げたい」というこ

とが、立教の元一日における、親神様の思召です。

「世界一れつをたすける」との思召は、元初りにおいて、「どろ海の中から人間を創って、その陽気ぐらしをするのを見て共に楽しみたい」との、人間創造の元一日の思召によるのです。ですから、「世界中の人々をたすけ上げて、陽気ぐらしを味わわせてやりたい」ということが、親神様の思召の根本です。これを実現するために、教祖をやしろとして教えを諭され、陽気ぐらしへのたすけ一条の道をお付けくださったのです。

この親神様の壮大なる御心にお応えするためには、まずは自らが陽気ぐらしを実践し、人をたすける心になって、これを身に行って、

陽気ぐらしの教えを世界の人々に伝え広めていくことです。これをお互いにしかと心に治めて、「世界一れつをたすけたい」との親神様の切なる御心にしっかりとお応えさせていただきたいと思います。

## 陽気ぐらしのいんねん

陽気ぐらしとは、「親神様を親と慕い、互いに兄弟姉妹としてたすけ合う世界」です。親神様は陽気ぐらしをするために人間をお創りくださったので、全ての人間には、陽気ぐらしができる元のいんねんがあります。いんねんと聞けば、悪いイメージを持つ方がおられます。実際にいんねんで悩み苦しむのですが、これは人間がほこりの心で後から付けた悪いいんねんのことであって、元々のいんねんは、陽気ぐらしができるいんねんです。これが私たちにはある。つまり人は皆、人をたすけることのできる資質を、生まれながらにして持っているのです。

遺伝子研究の第一人者であった筑波大学名誉教授の故村上和雄先

生が、以前遺伝子の活性化について、「全ての細胞の遺伝子に『たすけ合う』ということが書き込まれている。書き込まれていないのは、ガンの細胞だけ。つまり、人がたすけ合いをすることによって、ガン細胞以外の全ての細胞の遺伝子は活性化する」と、話されていた。

身体の中にある60兆からの細胞が「たすけ合う」ことを主張しているわけですから、親神様からお借りしているこの身体は、人だすけの集合体、人だすけのかたまりのようなものです。

人一人ひとりには、陽気ぐらしのいんねんがあります。人間は、たすけ合うためにこの世に置いていただいていることを、改めて心に刻ませていただきたいのです。

## 教祖のひながたを手本に

教祖百四十年祭に向かう三年千日は、教祖のひながたの道を仕切って通らせていただく旬です。教祖のひながたを辿り、教祖から教えていただいた教えを実践するた



めの抛り所になるのが、教祖伝と逸話篇です。殊に逸話篇は個別の事柄に関する教祖の道すがらであり、教え論しでありますから、お手本にしやすいと思います。おたすけをする者としての心の治め方や、おちばへ導くことの大切さ、人を迎える際の言葉の掛け方、心の遣い方を教えていただけます。

教祖のひながたは、人だすけを志す私たちにとつての抛り所であり、手本ひながたです。教祖のひながたを、これからのおたすけに活かすことができるよう、教祖伝と逸話篇から教祖の御心をよく汲み取らせていただきたいものです。

おたすけをさせていたいただくよう  
はくは、心根を「世界中の人間を隔てなく、余すことなくたすけ上げたい」という親神様の御心に置くことだと私は考えています。この「隔てなく」余すことなく」というのがなかなか難しいと思います。では教祖はどのようになさったのでしょうか。これを教祖最後の御苦労に見てみたいと思います。

最後の御苦労は、教祖がお姿を隠される1年前の明治19年の冬、樺本分署への12日間の勾留でした。このときの様子は教祖伝に詳しく記されていますが、その中で、教祖が居眠りをしている巡査に、お菓子を与えようとなさったくだりがあります。このときは孫のひささんが付き添っていました。表通りを通ったお菓子売りを教祖がご覧になって、「ひさや、あの菓子を買い。」「あの巡査退屈して眠って御座るから、あげたいのや。」と言いつけられましたが、ひささんが、「ここは、警察で御座りますから、買う事出来ません」と答えると、教祖は、「そうかや。」

と仰られたという一節です。

この勾留中の12日間は、毎夜最低気温が零下になるという寒さにもかかわらず、教祖には寝具一切渡されず、昼間は格子越しに道行く人々へのさらしものにされ、寒さ厳しい時期に水をかけられそうになったり、さらにはもつとひどい仕打ちも受けられました。その仕打ちをした警察官が退屈そうに居眠りをしているのをご覧になって、「お菓子をあげたいのや」と仰られた教祖の御心を、私たちは学ばねばなりません。まさにようばくの、おたすけ心の手本ひながたです。

皆さんにも、嫌な思いをさせられた人や、顔も見たくない人もあると思います。その人と「仲良くなれ」とは言いませんが、その人が身上や事情で心底苦しんだときには、神前に額づいて、親神様・教祖にその人の御守護とたすかりを心から願うことができれば、教祖はきっとお喜びくださると思います。さらに、おさづけを取り次ぎ、悩みを聞かせてもらおう。これ

ができれば、教祖はもつとお喜びくださるに違いないと思います。

この教祖のひながたにこもる御心をわが心としておたすけに臨めば、教祖が存命の理で必ず導いてくださると思います。教祖のひながたを頼りに、お互い真心を込めておたすけに励ませていただきます。しよう。

### つとめとさづけ

おたすけをすることが、今の旬のようぼくとしての最も大切な役割の一つです。困っている人を見れば手を差し伸べる。悩み苦しんでいる人があれば、声を掛けてその心に寄り添う。こうしたことが、おたすけの基本的な行動かと思えます。しかしこれは、信仰をしていない人であっても、心ある人はやっておられます。

私たちお道の信仰者ならではの  
おたすけは何か。それはたすけ一条の二本柱であるつとめとさづけ、これをもつておたすけをさせていただきます。このつとめとさづけがお道のおたすけの基本中の



基本です。この基本に立ち返って、おつとめでたすかりを願ひ、病む人におさづけを取り次がせていただくことが、親神様の御心に適ったおたすけなんだと心に治めて実行をして、その上でいろいろな形の人だすけに励まさせていただければ良いのです。

実は先月、心臓の冠動脈の一部が詰まりかけていることが検査で判明し、憩の家に入院してカテーテルの治療を受けました。血管の中に異物を通すわけですから、いささかの不安感がありました。

治療の日の朝、病室の窓から本部神殿の方に向かっておつとめで勤めていたところ、東の山から朝日が昇ってきました。「いちれつすましてかんろだい」と唱えながら、ちようどお日様を両手で受ける格好になったのです。このときに、「ああ、これで大丈夫。無事に済ませていただける」と不安感は消えて、安心感に包まれました。また、当日の大教会のお願いづつとめで私の名前を祭文に奏上することも聞いていましたから、心を落

ち着けてこの治療に臨むことができました。

また、入院治療が決まってから、毎日家族がおさづけを取り次いでくれ、入院中は毎日、事情部講師の岡島役員からおさづけを取り次いでいただきました。狭窄の症状としては厳しいところを、おつとめでおさづけで間一髪たすけていただきました。身上の障りを頂く者にとつて、おつとめでお願いしていただき、おさづけを取り次いでいただくことほど、心強いことはありません。

### 信仰実践に身体を使う

このたびの入院治療は、血管の狭窄によるものでしたが、私たちの身体に張り巡らされている血管の長さは、約10万kmもあるそうです。また、心臓から出た血液が、新幹線並みの速さで、全身の細胞組織に酸素と栄養分を運んで、10万kmという道のりを経て心臓に戻って来ます。血管一つを取りましても、このような奇跡的な営みが身体の中で行われています。これ

は、各臓器や細胞一つを取つても、奇跡ともいえる御守護を日に頂いています。これが私たち一人ひとりが頂戴している身の内の十全の御守護のお働きです。

この親神様の御守護に満ち満ちた身体をお借りしている私たちは、日々心からお礼を申し上げることを決して忘れてはなりません。

そして、親神様の御心に添わせていただけるように、教祖から教えにいただいた教えの実践、信仰実践にこの身体を使わせていただくことが、お互いようぼくとしての日々の通り方です。

そこで、今の句に実行すべき信仰実践の指針を論達に示してくださっています。「おちばを慕い進んで教会に足を運ぶこと」「ひのきしんに励むこと」「身近なところからにをいをかけること」「身上、事情で悩む人々に親身に寄り添い、おつとめで治まりを願ひ、病む者にはおさづけを取り次いで、真にたすかる道があることを伝えること」「これを心がけて実行させていただくことが、今日の大切な道

の歩みであります。

この中でもおつとめをしつかりと勤め、真心を込めておさづけを取り次ぐことが、ようぼくに与えたいだいている最も大切な信仰実践であります。つとめの理で世界のいんねんを切り替えてくださり、さづけをもつて個々のいんねんを切つていただくのです。

おさづけを取り次ぎますと、手を添えた箇所が「温かく感じます」と言われることがよくあります。これは取り次ぐ人の手の温かさによるものですが、私はその人の手の温かさを通して、教祖のぬくもりを感じることができると思うのです。

たんく<sup>とよふ</sup>くにて<sup>は</sup>このよふを  
はしめたをやがみな入こむで

十五号 60

このよふをはしめたをやか人こめば  
どんな事をばするやしれんで

十五号 61

と教えられるように、親神様が教祖をしてようぼくに入り込んでくださつて、御存命の理のお働きをもつておたすけくださるのです。

この尊い理を私たちようぼくは戴いているのです。ですから、お互いに、自信を持って、真心を込めて病む人におさづけを取り次がせていただきたいと思います。

そして、おつとめ。このおつとめの根本はおちばでお勤めくださるかぐらぶとめであります。その理を受けて勤めるのが各々の教会の月次祭です。

またおつとめには、特別な御守護を願って勤めるお願いづとめがあります。ご承知のように、大教会では毎日お願いづとめを勤めています。大教会でのお願いづとめで、不思議な御守護を頂かれた話を度々と聞いていますので、お伝えしたいと思います。

### お願いづとめでの御守護

6月の初めのことですが、母の知人の奥さんが憩の家で受診したところ、重症筋無力症と診断され、診察中に徐々に体に力が入らなくなり、緊急入院しました。担当医から、「今日から5日間が山です。急に亡くなることもあります」と

の診断を受け、ご主人が、母のところへ「何とか神さんでたすけてほしい」と飛んで来られました。ICUでの治療でおさづけには行けませんので、その日は本部神殿へ同道してお願いをし、翌日から3日間を仕切って大教会のお願いづとめで名前を奏上して御守護を願ってもらいました。これをお聞き届けただけたのか、みるみる回復し、3日目には、おさづけを取り次いでくださった事情部講師に、ベッドに座ってお礼を申されるまでになったのです。このご婦人は、リハビリのためにしばらく入院をしたのちに退院し、今は元気になって、ご夫婦で度々と母の元へお礼に来ておられます。

また、ある教会のようぼくが、昨年暮れに右脳内出血で倒れ、これを聞いた所属の教会長は、コロナ禍で病院に行けないことから、自教会でお願いづとめにかかり、大教会にも願い出て、会長自身が大教会の月次祭の翌日のお願いづとめを毎月勤めるようにされました。このお願いづとめの理を戴い

て、このようぼくは半身不随になるような厳しい症状であったところ、歩けるようになり、半年後には所属教会へ参拝できるまで回復されたのです。「教会のお願いづとめと、大教会のお願いづとめのお陰です」と心から感激をしていましたと、所属教会長から喜びの報告を受けました。

大教会のお願いづとめで、このような御守護を見せていただいています。これは、初代様をはじめ先人方が、おつとめをもっておたすけをされ、数々の不思議やかな御守護を頂かれたその理が現れていると思わざるを得ません。皆様方の周りに、身上で苦しんでいる人や事情に悩んでいる人がおられたら、教会や布教所、講社の神様に、そのたすかりを真剣にお願いした上で、どうか遠慮なく大教会のお願いづとめに願い出ていただきたいと思います。どれほどの御守護が頂けるか分かりません。

### 2名以上の初席者を

親神様の思召は、「陽気ぐらし世

界実現のために、世界一れつをたすける」ことです。しかし現実を見れば、今のようぼくの数で、世界76億の人々をたすけることは、困難極まりありません。

では、この親神様の思召にお応えするために、私たちは何ができるのだろうか。それは、私たちと共にたすけ一条の道を歩んでくれる人材を、地道に増やしていくよりありません。親神様はおふでさきを通して、

一寸はなし神の心のせきこみハ  
よふぼくよせるもよふばかりを

三号 128

よふぼくも一寸の事でハないほどに  
をふくよふきがほしい事から

三号 130

と、陽気ぐらしに向けて大勢のようぼくが必要だと仰っています。

そして教祖は、50年のひながたの道中で、人々を引き寄せられ、おたすけをし、丹精を施して、たすけ一条のようぼくをお育てになられたのです。その途中で大半は道から離れましたが、御恩報じの心が治まった一握りの先人たちが、

にをいがけをし、おたすけをしてさらにようほくが増え、道は伸び広がって、今日の信仰の道があるのです。

東中央大教会初代会長の柏木庫治先生は、一信者から布教師になり、教会を設立してこれを大教会にまで丹精をして、本部長になられた偉大なる道の先輩です。柏木先生は、「私が直接たすけたのは8人だけである。この8人が、にをいを掛け、おたすけをしてくれたお蔭で、東中央大教会はできたのだ」と言っておられました。

よふぎでもにんわたれともゆへねども  
もとハ壹ほんゑだわハほん

十二号 15

との、おふでさきのお言葉が胸に迫ってくるような話です。この話から、一人の人をたすけることの大切さを学ぶことができます。

世界たすけと言っても、皆が皆世界各地へ出向く必要はありません。真柱様が論達で「家庭や職場など身近なところから、にをいがけを心掛けよう」と示してくださるように、まずは周囲の身近な人

人を対象にすれば良いのです。たとえ家族や近しい親戚であっても、信仰をしていなければ未信者ですし、職場や知人の中には未信仰の

人はたくさんおられます。そうした人たちの向こうにはさらに大勢の未信者がいることを思えば、一人のおたすけから、その先に道が広がっていく可能性は大いにあります。この身近なところのにをいがけ・おたすけが、ようほく一人ひとりの世界たすけになるのです。

来年の年祭活動2年目は、「1教会に2名以上の初席者を御守護頂こう」との目標を定めました。これは、親神様の思召にお応えするために、にをいがけ・おたすけに仕切って励んで、ようほくになるために最初の順序である初席の御守護を頂こう、との思いからの目標であります。

一人の人ににをいをかけ、おたすけをすることは容易なことではありませんが、私たちには信仰があります。親神様の御守護を心底信じて、教祖の存命の理に縋りついて、にをいがけ・おたすけに、

力いっぱい努めさせていただきたいと思えます。

### たすけの句・成人の句

これまでの年祭活動でも不思議なたすけが、度々と挙がっています。そこで、教祖百三十年祭活動の句に受けたおたすけの報告の一つを、紹介したいと思います。

ある婦人ようほくの、19歳になる娘さんが、頭痛が続くので病院で診察をしたところ、脳動脈解離との診断を受け、即刻入院をしました。血管がコブのような状態になり、これが破裂すると、突然死を引き起こすとても怖い症状です。

そこでこの母親が、娘が翌年に専門学校に入るつもりで貯めていた資金を全て教会にお供えし、所属教会、上級教会、大教会でお願いづとめを勤めて、おたすけに掛かったのです。そうしたところ、その4日後の再検査で、コブがなくなつて元の血管の状態に戻っていることが分かり、その翌日に退院をするといった実に鮮やかな御守護を頂いたのです。

しかも、よく聞けば、その母親も、その30年前の教祖百年祭の年祭活動の最中に、交通事故で、頭蓋骨陥没、脳挫傷で命のないところを、関係者の必死のおたすけで、後遺症一つ残らないという、奇跡的な御守護を頂いていたのです。

ですから、この親子は、2人揃って、教祖の年祭の句にたすけていただいたのです。教祖の年祭の句には、こんな御守護があるのです。教祖年祭の句は、たすけの句・成人の句です。打てば響く句、薙けば実る句です。私たちはとてつもなくありがたい句の真っ只中にいます。こんな時にじっとしているわけにはまいりません。勇むことです。動くことです。

年祭活動1年目もあと2カ月、年が明ければ早くも2年目を迎えます。どうか、たすけ一条の御守護と喜びに沸き立つような年祭活動をお連れ通りいただけるように、心嬉しく心明るく時句の道の歩みを、一手一つに勇んで進ませていただきますましよう。



立教百八十六年 秋季大祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長に代わり井筒敏成、慎んで申し上げます。

親神様には、陽気ぐらしを楽しみに、紋型なきところからこの世人間をお創め下され、天保九年十月二十六日、旬刻限の到来と共に魂の因縁ある教祖をやしるにこの世の表にお現れ下さいまして、これの世界たすけの最後の御教えをお説き明かし下さいました。爾来、深く篤いお慈しみと温かさお導きを頂いて、これの道は次々と伸び開け、妙なる御守護を以て陽気世界へとお連れ通り頂いております親心の程は、誠に有難く勿体ない極みでございませう。私共は、賜る御厚恩に日々御礼を申し上げ、思召に沿わせて頂きたいと、たすけ一条に努め励まして頂いておりますが、この月の二十六日には、立教の元一日を祈念して、御本部において秋季大祭をお勤め下さいますので、芦津大教会もその理を戴いて、只今から役目にあずかる者一同、心を一つに座りづとめ、陽気てをどりを勇んで勤めて、秋季大祭を執り行わせて頂きます。御前には今日を大切な一日と参り集いました芦津の道の子供達が、立教の元一日に思いを深め、心嬉しくおうたを唱和して、人々のたすかりとこの世の治まりを祈り願う真実の状を御照覧下され、親神様にもお勇み頂きまして、年祭活動の一層の進展をお見せ頂きますよう御守護の程を御願い申し上げます。

私共をはじめ、芦津に繋がる道の子一同は、「みきを差し上げます」と、厳しい状況の中、夫善兵衛様のやむにやまれぬ神一条の心定めによつてこの道が始まった元一日に思いを致し、親神様の世界たすけの思召にお応えさせて頂けるよう、一人ひとり心が定め、陽気ぐらし世界を思い念じて、銘々にできるにいがけ・おたすけを素直に実行実践して、教祖にお喜び頂ける成人の道を、心を揃えて只管に歩ませて頂く決心でございます。何卒親神様には一同のたすけ一条の心根をお受け取り下さいまして、大らかな御心に私共の成人をお見守り下さいますと共に、教祖年祭の旬の理を戴いて、おたすけの御守護の喜びに沸き立つような時句の道の歩みをお連れ通り下さいますよう、一同と共に慎んで御願い申し上げます。

秋季大祭 祭典役割

祭主		扨者	扨者	地 方	てをどり	座りづとめ		前 半	後 半	献饌長	
井筒敏成		山田道弘	岩切正教	奥田正徳	井筒敏成	井筒敏成		加世田洋	石川健郎	湯川正圀	
指図方		賛者	賛者	岩切正教	井筒敏成	井筒敏成		加世田洋	石川健郎	湯川正圀	
湯川正圀		川畑正博	木村真次	奥田正徳	井筒敏成	井筒敏成		加世田洋	石川健郎	湯川正圀	
守田清一		川畑正博	木村真次	奥田正徳	井筒敏成	井筒敏成		加世田洋	石川健郎	湯川正圀	
伝供		川畑正博	木村真次	奥田正徳	井筒敏成	井筒敏成		加世田洋	石川健郎	湯川正圀	
川畑正博		川畑正博	木村真次	奥田正徳	井筒敏成	井筒敏成		加世田洋	石川健郎	湯川正圀	
竹内忠博		川畑正博	木村真次	奥田正徳	井筒敏成	井筒敏成		加世田洋	石川健郎	湯川正圀	
山本義範		川畑正博	木村真次	奥田正徳	井筒敏成	井筒敏成		加世田洋	石川健郎	湯川正圀	
吉田裕和		川畑正博	木村真次	奥田正徳	井筒敏成	井筒敏成		加世田洋	石川健郎	湯川正圀	
西本義之		川畑正博	木村真次	奥田正徳	井筒敏成	井筒敏成		加世田洋	石川健郎	湯川正圀	
奥田正徳		川畑正博	木村真次	奥田正徳	井筒敏成	井筒敏成		加世田洋	石川健郎	湯川正圀	
新居正実		川畑正博	木村真次	奥田正徳	井筒敏成	井筒敏成		加世田洋	石川健郎	湯川正圀	
花岡昭儀		川畑正博	木村真次	奥田正徳	井筒敏成	井筒敏成		加世田洋	石川健郎	湯川正圀	
奥田正徳		川畑正博	木村真次	奥田正徳	井筒敏成	井筒敏成		加世田洋	石川健郎	湯川正圀	
井筒敏成		川畑正博	木村真次	奥田正徳	井筒敏成	井筒敏成		加世田洋	石川健郎	湯川正圀	
湯川正圀		川畑正博	木村真次	奥田正徳	井筒敏成	井筒敏成		加世田洋	石川健郎	湯川正圀	
岩切正教		川畑正博	木村真次	奥田正徳	井筒敏成	井筒敏成		加世田洋	石川健郎	湯川正圀	
山田道弘		川畑正博	木村真次	奥田正徳	井筒敏成	井筒敏成		加世田洋	石川健郎	湯川正圀	
井筒敏成		川畑正博	木村真次	奥田正徳	井筒敏成	井筒敏成		加世田洋	石川健郎	湯川正圀	

## 井筒貞彦四代会長五十年祭 井筒志まへ四代会長夫人三十年祭

10月28日、「井筒貞彦四代会長五十年祭・井筒志まへ四代会長夫人三十年祭」が本部祖霊殿で執行された。

午前9時、井筒家、親族、在籍者は、詰所を出発し、お墓地参拝。その後、本部祖霊殿に向かい、午前10時より、年祭・祖霊殿の儀が執行され、参列者が順次参拝をした。祖霊殿の儀終了後、本部神殿、教祖殿、祖霊殿を参拝し、滞りな



く終えた。

その後、詰所大広間において、参列者をお招きし、直会が行われた。大広間には四代会長夫妻の写真が飾られ、面影を偲んで和やかな雰囲気での会食となった。

また、前日の27日午前9時から準備ひのきしんが、午後1時からは全体での打ち合わせが行われた。集まった在籍者らは各係に分かれ、会場設置や清掃、直会準備、洗車やお墓地清掃など、ひのきしんに汗を流した。

### 布教キャラバン隊各地で開催

布教部（竹内義忠部長）は、9月のにをいげ強調月に合わせ、「身近なところから、にをいげを心掛けよう」とようぼく一人あたり3部のパンフレットを配布し、布教実動を促した。続いて9月末より12月にかけて、全国8ブロックで「布教キャラバン隊」を実施している。参加対象は、教会長夫妻、教会長後継者夫妻となっており、各教会の布教力と布教意欲の向上を目指している。

実動期間も中盤を迎え、各地で大いに盛り上がりを見せている。

◇ ◇ ◇

10月24日、31日の両日、大教会を拠点に近畿ブロックを開催。参加者は、24日は36名、31日は26名であった。両日とも、神名流し、戸別訪問と、勇んだにをいげ実動を行った。実動後はグループごとにふりかえりを行い、教会とし



▲1軒ずつ心を込めて戸別訪問  
(近畿ブロック)



▲実動後のふりかえりでは、活発に意見が交換された  
(近畿ブロック)

て今年から新たに始めたことや、にをいげけ方法などの情報交換を行った。

参加者からは、「普段はにをいげに行く時間をとることがなかなかできないので、参加してよかった」教会の情報交換ができた」「これからにをいげに出るときは、信者さんにも声を掛けて出るようにしたい」などの勇んだ声が聞かれた。

◇ ◇ ◇

11月2日は島原分教会を会場に長崎ブロックを開催。教会長夫妻、後継者、教会住み込み夫婦ら22名が参加した。

長崎ブロックでは、ねりあいを中心としたプログラムを実施。「布教活動」教会内容の充実」という2つのテーマで、全員がそれぞれの思いを語った。

参加者からは「自分の思いを人前で語ったり、人の言葉をじっくり聞く機会は、コロナ以降は全くなかったの、とてもいい時間になった。参加してよかった」など、前向きな意見が聞かれた。



# 喜びの奉告祭

## 四代会長就任奉告祭

東大屋分教会

10月15日、島原部属・東大屋分教会（長崎県南島原市）は、井筒年子・大教会長夫人、井筒敏成さんをお迎えして、八木香織四代会長就任奉告祭を執り行った。参拝者は80名であった。



その中で、今年1月、突然の出直しとなった八木幹雄前会長が力を注いでいた若年層の育成に触れられ、この日、大勢の若者が集まった教会の姿を、その功績と称えられた。さらに、若者に対して「共に勇んで年祭活動に邁進しよう」と促された。

おとめの後、挨拶に立った八木会長は、前会長の出直し以降の導きや多くの支えに御礼を申し上げると共に、「前会長の遺志を引き継ぎ、精いっぱい努めます」と決意を述べた。

記念撮影の後、会食。和やかな一時を過ごした。

## 七代会長就任奉告祭

明道分教会

11月5日、明道分教会（大阪府堺市）は、大教会長夫妻隣席のもと、松森誠太七代会長就任奉告祭を執り行った。明道の道は、初代会長・佐

藤弥三郎が、林松之助よりにをいがかり入信。明治43年、広島市で明道宣教所を設立した。昭和20年広島に投下された原爆により教会は全壊し、名称の理を大教会にお返ししたが、26年松森アサノが四代会長に就任し大阪市で復興、60年に現在地に移転した。

奉告祭は、午前10時より記念撮影。松森会長の祭文奏上の後、大教会長が挨拶。新会長に対し、「ちばと息一つに心を合わせ、教会に繋がる方々と一手一つに、陽気ぐらしの実践道場となる教会を目指してほしい」と期待を述べられ、前会長夫妻の25年間の務めに、



労いの言葉をかけられた。

おとめの後、松森会長が、「御恩報じの道をしっかりと次の世代に繋げられるよう、精いっぱいつとめさせていただきます」と決意を述べた。

その後、祝賀会。前会長夫人の司会で始まったビンゴ大会で盛り上がった。

参拝者は36名であった。

## 第3回芦津学生会総会

10月29日、芦津学生会は大教会で第3回総会を開催。芦津に繋がる高校生、大学生ら38名が参加した。

午前10時より、木村里香委員長（芦明徳）が祭文を奏上。1年間の活動のお礼と、教祖百四十年祭に向け、ひながたを学び、教祖に喜びいだきたいとお誓いした。その後、全員がおとめ衣を着け、3

交替でおとめを勤めた。式典では、木村真次・学生担当委員会委員長が開会の挨拶。「ようばく一斉活動日」のメッセージビデオを視聴した後、大教会長が祝辞。「お

つとめを勤めること、おさづけを取り次ぐことを教祖は一番喜んでくださる」と教えの実行を促された上で、「相手のことを思いやり、声をかけ、手を差し伸べられる、そんな学生会になつてもらいたい」と要望された。

木村里香委員長の挨拶に続き、森道治・次期委員長（芦南）が来春実施する徒歩団参」と「春の学生おぢばがえり」への参加を呼び掛けた。

午後からは、食堂で昼食とアトラクション。スリッパラリーやクイズ、福引大会で楽しい時間を過ごした。





あしつファミリーひのきしん  
10月21日、育成部（山田道弘部長）は、大教会で今年2回目の「あしつファミリーひのきしん」を開催。大教会の年祭活動の方針の一つである「ひのきしんと伏せ込み」を目的に、親子が揃って大教会に伏せ込み、旬の理づくりをさせていた。こうと、午前9時には、大人18名、子供11名、午後には、大人10名、子供8名が参加した。  
午前10時30分、お願いづつめ終了後神前に集合し、皆で参拝。山田部長より挨拶があり、ひのきしんが始まった。

大教会参道の植木の剪定、除草、会長宅側の植木の剪定を各所に分かれ、和やかな雰囲気の中でひのきしんに汗を流した。  
昼食を挟んだ後、午後からも剪定や除草、また切られた草木の清掃ひのきしんを行った。終了後は参加者に大教会のお下がりが配られた。  
参加者からは「家族で和気あいあいといひのきしんができて、どんどんきれいになっていくので、気持ちよかった。また家族で参加したい」といった声が聞かれた。

## 教務部報

### おさづけの理拝戴《9月》

畠山 雅也（芦 玉）  
奥田さつき（豊 野）  
森山 善大（大真永）

〔拝戴日順 3名〕

### 初席《9月》

〔1名〕直轄、芦名、島原、

周宝、真伯

〔順序運びより 5名〕

## 計 報

芦種分教会四代会長（始良部属）  
高崎裕子姉（たかさきゆうこ）

令和5年11月6日出直され



た。享年67歳。

告別式は11月8日、川畑正博・始良分教会長斎主のもと、滋賀県東近江市の自宅で執り行われた。

姉は昭和31年6月6日、鹿児島県西之表市に父・横手一、母・ふみこの子として生まれ、天理高校二部卒業、51年おさづけの理拝戴、53年修養科第41期修了、62年教会長資格検定合格、平成26年芦種分教会四代会長に就任。

上級・始良分教会へのつくし運びに尽力された。また、信者の丹精とおたすけに心を配られると共に、特技のリンパマッサージで多くの方に喜ばれた。

月例統計（自令和5年1月1日～至令和5年9月30日）

項 目 名 称 ( ) 内教会数	初 席	の お 理 さ づ け	修 養 科 修 了	教 人
大 教 会 (1)	10	9	2	
東 津 (13)	2		1	
吉 野 (23)		1	1	2
島 川 (29)	2		2	
日 原 (16)	6	2	1	2
稗 方 (15)	3	1	2	4
本 島 (7)	4			
日 津 (2)				
始 高 (2)				
津 良 (5)				
門 和 (12)	3			
當 別 (6)	2	2		2
大 島 (26)	17	3	2	
沖 縄 (3)	1			
尼 崎 (2)				
四 ツ 山 (5)				
大 冠 (2)				
島 下 (1)	1			
青 保 山 (1)				
芦 浪 (1)	1			
甲 邊 (1)		1		
芦 華 (1)				
天 津 (1)				
入 江 (1)				
豊 野 (1)		1		
紀 周 (3)	2	2		
勝 明 (1)				
神 の 島 (1)	1			
兵 庫 眞 洲 (1)				
芦 ノ 郷 (2)	4			
本 明 勇 (2)	2			
明 道 (1)				
芦 東 (1)				
和 鎮 (3)	1	2		
神 滝 本 (1)				
芦 明 徳 (1)		1		
眞 明 彰 化 (2)	1			1
本 氣 (2)	1			
芦 明 照 (1)				
眞 伯 (1)	1			
合 計 (209)	65	25	11	11